保育士養成校の通信教育における音楽教育に関する研究

上田 浩平

Study on Music Education in the Correspondence Course of the Childcare Education in Junior College

Kohei UEDA

Abstract

People in hope of the qualification by the correspondence course increase as of one of a variety of social conditions. Meanwhile, in the correspondence course of the childcare education in junior college, there are many students that the attendance of the practical skill subject such as the music becomes the neck of the qualification. I lecture about a problem and an action to the technical improvement of the practical skill subject of the student who is going to acquire a childcare person license in a correspondence course in this study and want to connect it with a study to make use of for the music activity in the real childcare spot.

Key words: correspondence, piano, vocal music

1.はじめに

筆者は、本学において非常勤講師 2 年を含む 4 年間、通信教育部保育科の学生に対し、また他校にて 5 年間の非常勤講師勤務にて全日制の保育科の学生に対し実技科目の「器楽」「声楽」「子どもの歌弾き歌い」「子どものための音楽表現」の授業を行ってきた。その実務経験で得た学生の現状をもとに研究を進めている。

毎年入学してくる新入生の多くが鍵盤楽器に触れたことが無い初心者の状態である。そ して、歌唱についてもほとんど経験がないまま入学してくる。

そのような中、全日制の学生については、毎週の授業で技術の向上のための助言・指導を継続的に行っていくこと、日頃よりコミュニケーションを図ることが可能であるが、本学の通信教育部の学生については、スクーリング時のみのレッスンとなるため、継続的な指導ができず、技術の習得につなげることが難しい。また、継続的な練習の管理や、どのような状況で練習しているのかなど、学生の音楽環境の把握がきわめて困難であり、学生

の申告以外で把握することができないのが現状である。

本論文では、筆者が接してきた通信教育部保育科の学生に主眼を置き、音楽の実技科目の技術向上への課題と取り組みについて検討し、卒業後の保育現場での音楽活動に役に立てる研究にしたいと考える。

2. 「器楽」について

音楽の実技科目において、最も困難で、時間がかかるのが「器楽」=「ピアノ」である。 ほとんどの学生が鍵盤楽器に触れることなく初心者の状態で入学してくる。新入生時にお いて、まず躓く科目のひとつである。

(1) スクーリング時のレッスンについて

多くの学生が読譜ができないことから、一人ひとりの理解度に合わせて、レッスンを 進めていっているのが現状である。その様な状況でも、全日制の学生においては、2年も しくは4年の間にある程度の知識を身に付け、一人でも読譜が可能になる学生は多い。も ちろん、全日制の学生の読譜理解についても問題点・課題点は多いが、これまでも多くの研 究が成されているため今回は取り上げないこととする。

通信教育においては、自宅学習で理論の勉強が可能である。学生が自宅学習で得た知識を問題用紙で回答し、郵送する。それを担当教員が採点し、また学生への元へと返送する。この通信制独自のシステムで、一人ずつの理解度を把握し丁寧に指導することができる点においては効率の良い学習であると考える。しかし、実技レッスンにおいては、また別の視点での問題が出てくる。鍵盤楽器を鳴らすためには、まず、正しい鍵盤の位置に指を置くところからはじまる。正しい鍵盤の位置に指を置き、押すことで鍵盤楽器は音を発する。しかし、この鍵盤を押すという行為に自然と入っていけない学生が多い。以下の表が鍵盤を押すことに躊躇している理由である。

(表 1) 鍵盤楽器を弾くことに抵抗がある理由

1	記譜されている音の場所を、時間をかけて探さなければならない。		
2	指・手に力が入って、思うように動かすことができない。		
3	楽譜に記譜されている音の場所が分からない。		
4	両手を一緒に動かすことが困難。		
(5)	先生の横で緊張する。		
6	練習しているピアノと、レッスン室のピアノの大きさが違うから分からなくなる。 (練習はアップライトピアノ、レッスンはグランドピアノで行われる 養成校が多い)		

以上のように、学生によってさまざまな理由がある。これも全日制の学生であれば、 日頃より練習している状況の把握、学生とのコミュニケーション、教員間での連携で、 継続的な練習に結びつけることが可能であると考えられる。また環境に慣れることによ って緩和されることも多いと考えられる。

しかし通信教育の学生は、年に数回のスクーリングのみで、それ以外は、各学生が師事する先生の指導方法に頼らざるを得ない。数ヶ月かけて各学生が習得してきた技術を、わずか 3 日間のレッスンで手直ししなくてはならず、細部にまで渡るレッスンができていないのが現状である。そして、何より日頃の練習に携われないため、その限られた時間で、各学生に応じた指導法を見極めることも難しい。学生の苦手な箇所・問題点・課題点を見つけたころにはスクーリングが終了してしまうことがある。そうなると、また翌次年となり、時間を置かざるを得ない。このようなジレンマの中、通信教育部の教員たちは、試行錯誤を重ねているのが現状である。

試行錯誤の状況ではあるが、現在 1 番成果を感じている時間の使い方が、以下に示したものである。

0~15分	全体出席確認・進路状況確認・レッスン順番決め		
15~30分	学生 A レッスン・現状技量確認 (学生 B、C は自主練習)		
30~45 分	学生 B レッスン・現状技量確認 (学生 C、A は自主練習)		
45~60分	学生 C レッスン・現状技量確認 (学生 A、B は自主練習)		
60~75分	学生 A レッスン②・学生に適した指導内容 (学生 B、C は自主練習)		
75~90分	学生Bレッスン②・学生に適した指導内容 (学生C、Aは自主練習)		
90~105 分	学生 C レッスン②・学生に適した指導内容 (学生 A、B は自主練習)		

(表 2) スクーリングにおけるレッスンの時間割振

※本校では、通信教育部の1コマは105分である。

上記のように、まずはじめの 15 分で、学生の現在の技術を理解したうえで適切なアドバイスを行い、練習箇所の指定と、現在の問題点について説明し 30 分後のレッスン②へのアドバイスを行う。各学生に同じことを行う。そしてレッスン②の最後には、翌日のレッスンまでに行う練習箇所を指定する。その様なレッスンを数日繰り返すことで、最終日の実技試験での合格及び確実で敏速な技術向上へと繋げることができる。

そのような指導が可能なのも、通信教育に通う学生の多くが、意識が高い中での学習のため、日頃不足しがちな練習もスクーリング中に集中して行うことができる。この点においては、全日制の学生に比べて優位な点であることは間違いない。日頃は仕事をしながら、また育児をしながらの学生が圧倒的に多い為、各学生が時間の大切さを十分に理解しスクーリングに参加している。確実な成果を得て、次に繋げよういう意欲の表れからであることは容易に想像できる。集中力でカバーできるのもスクーリングの有意義

な点である。

現時点においても、試行錯誤をしている状態であるため、確たる指導法が見つかっていないのが現状である。しかし、現状においても、今できる最良の指導を随時検討し授業を進めていく次第である。

(2) スクーリングがない時期のレッスンの問題点について

大きな課題点として、学校がスクーリングを開催していない時期の、学生の練習状況とレッスン状況の把握がある。その期間の学生の技術管理を、学生が個人で習っているピアノ講師に依存しているのが現状である。学生が各々自由にピアノ講師を見つけてレッスンを受けている。これは現状では致し方ないことではあるが、これまで担当した学生で、最も問題と感じたことは、ピアノの専門教育を受けておらず、自己流で習得した者が学生に指導するケースである。まったく知識のない学生に対し、自己流の技術での指導では、十分な指導が困難であることは指摘するまでもない。

十分な指導がなされていないため、スクーリングを受講する時には、自己流の「クセ」が身についてしまい、その改善・修正に時間を取られてしまい、適切なレッスンができなかったことがあった。学生の所在地は全国各地に拡散しているため、全国各地のピアノ講師を把握することは極めて困難である。そのため、学校が委託する各地域の音楽教室などが存在することで、スクーリングが開催されていない時期でも、学生の管理は行うことができると考える。もちろん様々な問題や課題があることは筆者も承知である。しかし、今後このような事例が生まれないためにも、対策の一つとして議論する余地はあると考えている。

3. 「声楽」について

歌うことは、日常生活から行っている学生は多い。例えばカラオケである。流行りの楽曲や昭和歌謡などを歌唱することは機会が多いのではないだろうか。しかし、これが声楽となると学生によっては不得意な意識を持ってしまう者もいる。また、歌うことが苦手と感じている学生も比較的多いと感じる。

(1) コールユーブンゲンの歌唱方法について

コールユーブンゲンを授業で扱う全日制の保育士養成校において、多くの学校が 5 度音程までの修得を目的としている。そこには、「正しい音程で歌唱することができる」などの目標が存在するが、ほとんどの学生が、音程にこだわった歌唱をしたことがなく、多くの学生が戸惑いを持ってしまう。しかし、毎週の定期的な授業で鍵盤楽器の音に合わせて歌唱をすることで、自然と耳に馴染み、ほとんどの学生が在籍期間中に修得することができる。ここでも「器楽」同様、全日制の学生についても問題点・課題点は多いが、これまでも多くの研究が成されているため今回は取り上げないこととする。

本校通信教育部では、「声楽」については、スクーリング中の授業のみで、前もっての予習は必須としていない。そのため、3日間での習得が必要となる。まずは、楽譜に記載されている音と階名の一致からである。その後、リズムの確認。階名でリズム読みをするなど、効率の良い方法で行い学習のスムーズ化を図る。その後、音程の確認を行うと、比較的効率よく学生の学習が進んでいくことができる。音程の確認の際には、声を出して、実際に歌唱することがはじまる。まずは「開始音」を取るところで、スムーズに入れる学生と、困惑する学生に分かれていくことは、「声楽」を担当している教員においては十分承知のことであろう。比較的、女子学生はスムーズに学習を行える場合が多い。しかし、男子学生においては、異性すなわち女性の教員が実際に声に出して歌唱してしまうと、裏声を使っての歌唱となってしまうことがあり、困惑が進んでしまうことがある。よって、可能であれば、男性教員が担当するとよりスムーズに習得に繋がることが多いと筆者は考える。男性教員の歌唱を女子学生が模倣しても、音域的に不可能なことが多いため、女子学生が1オクターブ下で歌唱することはほとんどない。しかし、男子学生によっては、裏声が出る者は女性教員の模倣をしようとし、誤った歌唱となってしまう。このことについての研究は、また別の機会に詳しく研究したいと考えている。

その後、「3 度音程」、「4 度音程」の問題も生じることがある。「3 度音程」は低くなりがちな学生が多い為、短調と長調の感覚を感じさせることが重要である。そして「4 度音程」には、「増 4 度」がネックになることが多い。半音が 1 つ多く、間隔が広がることの理解を定着させ、注意を喚起する。また、「5 度音程」でも「減 5 度」が同様である。短時間での習得が必須なため、要点を少なくし、なるべく簡素な説明で混乱を防ぐことが重要であると考える。練習に必死になるうちに、自然と声を出していることが多いように思われる。この過程を得ることで、自然と歌唱教材への歌唱へ繋げていくことができる。

(2) 歌唱教材の歌唱について

コールユーブンゲンを学習した学生は、自然と声を出すことができるようになり、歌唱教材の歌唱は比較的スムーズに行える。学生の感覚としても、ソルフェージュだけの歌唱より、ピアノ伴奏で歌唱することの方が、より音楽を楽しめることは間違いないであろう。しかし、多くの学生が歌唱で躓くのは「音域」の問題である。「2点ホ音」、「2点へ音」になると喉をしめてしまい、思うように声がでなくなってしまう。この点においては学習環境に関係なく、どこの養成校でも同じような問題であり、課題であろう。

多くの養成校で、「こどもの歌」に入る前に、コンコーネ 50 番より、いくつかをピックアップし歌唱してから、「こどもの歌」に入ることが多い。歌唱教材への歌唱の導入として、自然と息の流れを利用し、高音へと繋げる練習に有効であるからである。また、伴奏を聞くことも歌唱するうえでは非常に大事なことである。音楽の三大要素である「メ

ロディー」「ハーモニー」「リズム」を養う上でコンコーネ 50 番は必要不可欠な学習である。保育士養成校が「コンコーネ 50 番」の中から比較的取り上げることが多い番号と、使用目的を下記の表にまとめてみた。私なりの楽譜の解釈から、保育士養成校の学生へ効率良く指導したい箇所でもある。

(表3) 保育士養成校における「コンコーネ50番」使用番号及び目的

1番	ハ長調。1点ハ音から2点ホ音までのスケール練習。 3度音程。5度音程。		
2番	ト長調。開始音1点ト音。		
3番	ハ長調。開始音1点ホ音。減・増音程。2点ホ音のロングトーン。		
5番	へ長調。開始音1点イ音。1オクターブの跳躍。		
7番	へ長調。半音。3連符。2点へ音。		
8番	変ロ長調。開始音2点ニ音。4度音程。タイ。		
11番	へ長調。4分の3拍子。		

可能であれば、上記以外の番号も取り上げたいところではあるが、「こどもの歌」歌唱 教材とのバランスを考慮すると、この程度の学習が通信制の学生に対しては限界である ように感じる。

歌唱は「メロディー」が主である。そこに伴奏が入ることで、より「リズム」が浮き出て、「ハーモニー」を感じることができる。音楽担当教員としては、この学習こそが、是非とも学生に触れてほしい重要な経験だと私は考えている。この点において、「コンコーネ 50 番」は非常に有効な教材である。筆者はいつか「コンコーネ 50 番」についての研究も行いたいと考えている。その後、歌唱の導入として使用した「コンコーネ 50 番」から、実際の保育現場で歌唱する「こどもの歌」の歌唱学習へと繋がっていくことが自然である。

なるべく多くの歌唱教材を学生の間に触れさせることで、より深い音楽への興味・関心へと繋げることができる。そして、より多くの歌唱教材を知ることで、音楽的知識が 豊富な保育士を育成することができる。歌唱は、最も身近な音楽表現である。楽器がな くても、すぐに行える音楽教育である。そのことを学生が自ら理解し、技術の習得に意 欲的に繋げることができるように指導したいと考えている。

4. 「弾き歌い」について

多くの保育園・幼稚園で、毎日のように行われている音楽活動が、保育士による 「弾き歌い」である。保育士のピアノやオルガンなどの鍵盤楽器の伴奏に合わせて、こどもたちと一緒に歌唱する。その音楽活動は、園児たちにとって基本的な生活習慣を学ぶ上で大きな役割を果たしている。登園した際には、「おはよう」などの挨拶で先生たちやお友達とのコミュニケーションがはじまる。園児の1日の活動場面を、それぞれの音楽で、

より良い活動にすることが可能である。多くの保育施設で使用されている「こどもの歌」には、「おはよう」「おべんとう」「おててをあらいましょう」など生活に直接かかわる「生活の歌」から、「かたつむり」「たなばたさま」「ジングルベル」など季節を感じるための「季節の歌」。また、「ぞうさん」「ねこふんじゃった」「アイアイ」など、生命が宿るものをイメージした「動物の歌」。そして、「だるまさん」「ひらいたひらいた」「あくしゅでこんにちは」など手や身体を動かしながら歌う「身体あそび歌」など多岐に渡っている。「こどもの歌」は、こどもたちの基本的な生活習慣から、心身の発達に至るまで多くの学びが集約されているのである。

(表 4) 本校通信教育部保育科にて「こどもの歌」としての弾き歌いで取り上げる教材

生	はをみがきましょう	おはようのうた	おべんとう
活	先生とおともだち	おかえりのうた	せっけんさん
0	おててをあらいましょう	おかたづけ	おはなし
歌	ハッピーバースデー	たんじょうび	
季	こいのぼり	うみ	たなばたさま
	かぜさんだって	たきび	しゃぼん玉
節	あわてんぼうのサンタクロース	思い出のアルバム	あまだれぽったん
	うれしいひなまつり	トマト	水あそび
0)	大きな栗の木の下で	つき	いもほりのうた
	やきいもグーチーパー	どんぐりころころ	まつぼっくり
歌	きよしこの夜	お正月	豆まき
	雪のペンキやさん	おはながわらった	
	ありさんのおはなし	ことりのうた	めだかの学校
動	かたつむり	虫の声	とんぼのめがね
物	あめふりくまのこ	山の音楽家	アイアイ
の	犬のおまわりさん	ぶんぶんぶん	あつかいありさん
歌	おうまはみんな	おうま	森のくまさん
	かわいいかくれんぼ	ぞうさん	やぎさんゆうびん
身	ひらいたひらいた	ひよこ	手をたたきましょう
体	かごめかごめ	大きなたいこ	ふしぎなポケット
遊	幸せならてをたたこう	おなかのへるうた	あたまのうえでぱん
CK	おもちゃのチャチャチャ	ともだち賛歌	
歌	かもつ列車	パン ドン タン	
2	ハッピーバースデイトゥユー	とけいのうた	
ど	一年生になったら	かもつ列車	

ŧ	線路は続くよどこまでも	サッちゃん	
0	おもちゃのマーチ	バスごっこ	
歌	おばけなんてないさ	ふるさと	

その「こどもの歌」を実際に、こどもたちに歌い聞かす活動として、「弾き歌い」が存在する。この活動を習得することこそ、最も必須な技術だと筆者は考えている。その技術を習得するために、準備段階として「器楽」、「声楽」の授業がある。「弾き歌い」とは、鍵盤楽器を弾きながら「歌う」という困難な活動である。この活動を、学生たちに習得させるための必須科目として「器楽」と「声楽」を学び、その先の学習として、最も保育施設で活かされる「弾き歌い」という活動に繋げることができると考える。

この活動を習得することが、通信制の学生にとっても、音楽科目で最も困難なことである。「器楽」の授業で何とかピアノを習得し、「声楽」の授業で歌唱の技術を習得したとしても、弾きながら歌うという身体活動は、かなりの訓練を要する。通信制の学生にとって、この難しい身体活動を、スクーリング期間以外も、根気強く練習し習得するのは、精神的にも追い込まれるところである。練習環境も含めて、周りのサポートが重要である。

各自が練習を重ねることも技術習得には必須条件であるが、スクーリング期間中に可能な限り細かなアドバイスを行い、ポイントを絞った指導をすることが重要である。

その1つが「指使い」である。「器楽」の授業でのピアノ演奏は、それに集中できるため、「指番号」にも注意を喚起して練習することができる。しかし「弾き歌い」になると、ピアノ演奏と一緒に、楽譜で歌詞の確認を行わなければならない。これが予想以上に難しい活動であるようだ。それまでできていた指使いが途端にできなくなるのである。そして、どうしても演奏を止めてします。そのことがストレスになり一向に練習が進まなくなるのである。しかし、技術の習得は「反復練習」あるのみ。全日制の学生へは日々のサポートでストレスを軽減することも可能であるが、通信制の学生にはまず不可能である。各自が師事している先生に託すのみである。

「弾き歌い」の指導方法としては、ピアノの練習をまず進め、指が慣れてきたところで歌を付けて練習させる。この点が重要である。ピアノと歌を同時進行で練習するのは、ピアノ経験が豊かな学生に限る。ピアノ演奏に気を取られなくなったところで歌詞をつけて、歌詞の内容を十分理解し歌唱する。ここまでを活動の一つとして行いたいところである。そして、ポイントは「大きな歌声」である。園児は、先生が楽しそうに歌唱するのを見て、「楽しい活動」と認識することが多い。大人の活動を常に見ている園児に、音楽の楽しさを体験させるには、先生の表情にあると考える。

また、筆者が「弾き歌い」で大切にしていることは、「間違えない」ことではなく「止まらない」ことである。 園児が歌唱してる祭に、先生が間違える度に演奏が停止していては、園児にとって非常なストレスで苦痛な活動になってくる。 多少の間違えに同様す

ることなく、次のフレーズへと移っていくことが大切である。この練習まで重点的に行 えることができれば、実践に向けた授業になる。通信制の学生には、よりポイントを絞 ったレッスンを行うことが望ましい。

5. その他の音楽活動について

通信制の学生を対象にした授業では、子どもの歌の「弾き歌い」までが精いっぱいであるのが現状である。しかし、筆者としては、「合唱」の授業や「オペレッタ」などの集団音楽活動まで行えることを希望している。一人での練習では体験することができない達成感や集団での音楽活動も学生の期間中に経験してほしい。

運動会では「鼓笛隊」、卒園式等で「合唱」をさせる保育施設も多い。この様な活動を、 実際に園児に活動させるためには、指導者である保育士等が、その知識を持ち合わせて いることが重要である。

実際に学生が体験できることが最も望ましいと思うが、時間の制限で活動まではできなくても、合唱作品を知識の一つとして取り上げ、オペレッタの作品をできる限り多く鑑賞させるなど、音楽担当教員の工夫次第で学生へ知識として与えることは可能である。今後は、そのような活動へも繋げていけるように努力したいと考えている。時間の工夫次第でまず取り入れることができる活動は、「合唱」であると考えられる。

また、現在ではさまざまなこども向けの歌が存在している。テキストには載っていないが、TVアニメやこども向け番組、映画などのメディアによって、素晴らしい作品もたくさん存在している。こどもたちの興味・関心があるものには、常にアンテナを張っておくべきであり、保育現場に取り入れられるよう準備しておきたいものである。

6. おわりに

これまで、筆者の未熟な経験で、通信制の学生への授業を通して筆者なりに論じてきた。多くの全日制の保育科で問題点・課題点になっていることと、通信制の問題点・課題点の多くは変わらない。全日制においては、これまでも多くの研究が行われている。 そして、その対処方法・改善方法も多く研究されている。

しかし、その対処方法・改善方法には通信制独自のものが必要であることを学んだ。 通信制の学生は、時間の制限のみならず、環境にも限られ、体験することも限られてい る。そのようなジレンマの中にあっても、少しでも学びたい、保育士になりたいという 強い志を持った学生が多く在籍している。だが残念ながら、現状の厳しさゆえ、音楽の 実技科目の習得がどうしても後回しになってしまい、音楽の実技科目のみを残したまま、 何年も時間が経過してしまう学生も多い。

そのような環境の中でも、免許を取得し卒業していく学生はまだ良いが、そのままあ きらめて辞めてしまう学生も少なくない。このような現状をどうにか改善したいと願い、 通信制を担当してる音楽担当教員は日々試行錯誤している。また、学生も試行錯誤しな がら、日々の実技練習を行っているものと考える。そして、やっとの思いで年に数回の スクーリングに出席するのである。緊張に加え、限られた時間での試験合格など、プレ ッシャーも多い。

筆者が論じたことで、少しでも通信制で学ぶ学生、担当する教員のお役に立てることを切に願っている。

今後、時代の流れもあり、通信制の養成校で保育士免許を取得する学生が増えることだろう。保育士が不足している現代において、働きながら免許が取得できる通信制は、全日制以上に必要となるかもしれない。そんな時代が到来した際には、よりより環境で、効率良く音楽技術の習得が可能になるように、引き続き実務を通して研究していきたいと考えている。

【参考文献】

城多又兵衛 解説 (2012)「コールユーブンゲン 巻 I 」音楽之友社

畑中良輔 編著 (2005)「コンコーネ 50番 中声用」全音楽譜出版社

埜口節子・西中頌子 編集(2014)「短大音楽教則本(器楽)」近畿大学九州短期大学

平松愛子 編著 (2016)「音楽 (ピアノ教本)」近畿大学九州短期大学

尾籠一夫 編集(2013)「短大音楽教則本(声楽)」近畿大学九州短期大学

久世安俊 編著(2016)「音楽(声楽教本)」近畿大学九州短期大学